

「人類と平和　　アジアの平和を求めて」

李登輝

二〇一四年九月廿一日　東京

日本李登輝友の会の小田村四郎会長をはじめ、会員の皆さま、ご来賓の皆さま、会場にお集まりの皆さま、こんばんは！

今回、日本李登輝友の会の招聘を受け、五年ぶりに日本へ参りました。かくもたくさんの方々の皆さまの前でお話できることは大変光栄なことと感じております。

また本日、会場には、家内と二人の娘も来ております。日本へ行

くことを決めたとき、娘たちから「これほど日本と縁の深い父親なのに、一緒に日本へ行ったことが一度もない」ということで、九十歳になって初めて娘たちを連れて日本へ参ったわけです。

さて、それではさっそくお話しを始めましょう。

戦後間もなく七十年を迎え、日本も台湾も、それを取り巻く国際情勢も大きく変わりました。日本が安全保障の大部分を委ねてきたと言っているアメリカは、九一一テロやリーマンショックによる経済力の凋落によって、アジアにおいて軍事力を十分に行使出来ない状態となっています。

今や世界は主導する国家なき戦国時代に入ったと言えるでしょう。これをアメリカの政治学者イアン・ブレマー氏は「Gゼロ」の世界と呼んでいます。

こうした混沌とした時代のなかで日本が生き抜いていくためには何が必要でしょうか。アメリカの衰退、中国の台頭、北東アジア情勢の急変を見ると、日本の真の自立が急務とされるのは明らかです。

この七月、安倍首相は集団的自衛権の行使を認める決断をしました。アメリカは時を置かずして「歓迎する」との声明を発表しています。私、李登輝も大歓迎であります。

集団的自衛権の行使容認は、これまで安全保障の大部分をアメリカに依存してきた不正常的な状況を脱するだけでなく、経済力の低迷が軍事力にまで影響を及ぼしているアメリカを喜ばせ、安心させることにもなるでしょう。

行使容認が、日米同盟をより強固なものにするとともに、まさに戦後長らく続いた、日本の不正常的な状態を正し、再生していくための第一歩であり、決断した安倍首相には心から敬意を表したいと思えます。

奇しくも、本日は安倍首相の六十歳の誕生日です。心からお祝いを申し上げるとともに、さらなる活躍を台湾から期待しています。

さらに、日本が真の自立した正常な国家となるためには、国家の基本たる憲法をどう改正していくかが、今日の日本にとって大きな課題です。これこそまさに安倍首相が目標とする戦後レジームを脱却し、「新しいレジーム」を構築するための正しい一歩ではありませんか。

ご存知のように、現在の日本国憲法はもともと英語で書かれ、日本語に翻訳されたものです。つまり、戦勝国アメリカが、日本を二度とアメリカに刃向かわないようにと押しつけたものが、現在の日本国憲法なのです。

その第九条では日本が軍事力を持つことを禁止しています。そのため、日本はアメリカに安全保障を委ねることになりました。しかし今やアメリカは頼りにならないだけでなく、日本自身も大きく変わり始めました。日本自身が再生への階段を上り始めたのです。

歴史をふまえながら、日本が真に自立するために必要なものを考えるならば、憲法問題を避けては通れません。特に第九条では、日本が軍事力を保持することを禁じています。

しかしながら、軍事力を保持することは即ち戦争を引き起こすことを意味するものではありません。自分の身を自分で守る、という国際社会における原則を戦後数十年も放棄したまま、国家にとって

致命的な問題が起きずに来られたのは日米同盟を通じたアメリカによる支援と幸運があつたからに他なりません。

人間は生まれながらにして戦わずにはいられない本能を有しています。

本日は、ロシアの文豪トルストイの『戦争と平和』をモチーフに、戦うということは人間の生物学上における本能であり、避けられないものであること、そのためには自分の国は自分で守るという力が必要不可欠だということをテーマにお話ししたいと思います。

人間は、自分が分割されない個 (individual) として、かけがえ

のない一回限りの生を生きる存在であることを自覚するとき人格となります。そのとき初めて、自分でない他のすべての人間と向かい合い、他の人間を自分とは分たれるから、なお自分と共に生きる「他者」として経験する可能性を持つのです。

こうして個としての自我意識を核としながら、自分に向かい合う世界を対象化して捉えていくことが出来るようになるのであり、そこに文化を生み出し、歴史を作り出していく人格的前提があると言つてよいでしょう。

ここで私のことを例に挙げましょう。十二歳の頃、私は家を出ま

した。それまでは、食事の際、母が家で商っていた豚肉の一番いいところを私の目の前にどっさりと盛ってくれたり、膝の上に抱き上げたりと私のことを溺愛していました。

しかし私は、母の愛情には感謝しつつも、このままでは自分がダメになってしまおう、自分が無くなってしまおうような気がして家を離れなければならぬと決心したのです。

とはいえ、これほど愛する息子が家を出るなどと聞いたら母はきつと悲しむだろうと考え、私は一計を案じました。「この三芝の田舎にいてはきつと学校の試験に受からないだろう。だから淡水の街へ出て勉強したい」と嘘をついたのです。

そして私は家を離れることになり、最初は先生の家で、続いて友人の家で居候をすることになりました。居候の身では、自分の家と同じように振る舞うわけにはいきません。まさに「居候、三杯目にはそつと出し」を地でいくような生活を経験したことで、他者との関わりというものを学んだのです。

十二歳だった私が家や家族というものから分離し、居候という共棲を選択したことは、人間としての本能的な選択だったともいえるでしょう。

こうした人間の自己形成にあたって、人は二つの根源的衝動と取り組まなければなりません。すなわち、共棲的環境からの分離への

欲求とともに自分を守ってくれる対象に近づこうとする結合への欲求です。

こうした「人間とは何か」の説明によって分かることは、個人の生活史の中で繰り返される生命原理が示す様に、分離と結合の繰り返しです。そして同時に自由と不自由の繰り返しでもあります。

人類と平和を論じる前に、戦争と平和を人間はどう考えているかを言わなければなりません。戦争はいけない、戦争はやむをえない、などと話す人の価値判断ばかりが先走った議論の多いなかで、現実の世界における平和がどのようになり得るのか考えなければなら

りません。

そこで、『戦争と平和』を書いたトルストイの考え方を見ることは非常に有益と考えます。トルストイは『戦争と平和』という本について数言」という、結びのなかで、彼にとって最も重要な考えを述べているからです。

「私は進行している歴史上の事件の原因は、我々の理性の理解の及ぶものでないことが明らかだと悟った。数百万の人間がおたがいに殺し合おうとし、五十万を殺した事件が、人間の意志をその原因としているはずがない。

何のために数百万の人間がお互いに殺し合ったのか、世界の創造の時から、それは肉体的にも、精神的にも悪だということがわかって
いるのに。

それが必然的に必要だったからであり、それを行いながら、人間たちはミツバチが秋になる頃、お互いに殺し合い、動物の雄たちがお互いに殺し合う、あの自然の、動物学的法則を實現していたからである。それ以外の答えを、この恐ろしい問いに答えることは出来ない。」

このように、トルストイの戦争に対する観察は、「人間とは何か」ということをよく説明しており、逆にこれはまた平和に対する人間の考え方にも当てはまることと思えます。

トルストイは、秋になって交配が終わると、せっかく集めてきた蜜をただ飽食するだけのオスバチは殺されてしまうというミツバチの法則について言及しています。

私もこの法則に関心を抱き、台湾南部の視察へ赴いた際、ちょうど養蜂場を訪れたため、オーナーに確かめてみました。すると、秋になるとオスバチがみな殺されてしまうというのは本当だ、という

ことでした。ロシアでも台湾でも、ミツバチの行動は変わることはなかったのです。つまり、ミツバチの本能がそうした行動を起こさせるということがわかりました。

同時に、こうした生きるためには犠牲を払わざるをえない例は人間にもあります。

日本の東北地方に「こけし」というものがありますが、日本から来るお客さんに対し、私はよく「こけしは男か女か」という質問をよくします。ほとんどの方が答えられません。

こけしは、数年に一度は凶作や飢饉に見舞われていた東北地方で作られたものです。飢饉になると食べるものがない。おのずと限ら

れた食料を食べさせる対象を決めなくてはなりません。男の子は将来働き手になるが、女の子はそうではありません。そうすると、口減らしの対象に選ばれるのは女の子ということになります。つまり、子供を消すから「子消し」というわけです。そして、女の子の霊を慰め、祀る意味で作られたのがこけしなのです。

もちろんこけしの根源には諸説あるようですが、私は人間が生きるための本能というものを考えた場合、この説が最もしっくり合うような気がしてなりません。

平和を求めたいというのは、大部分の人間の欲求でしょう。しかし、そうした期待はトルストイが『戦争と平和』で述べた考え方や、

「人間とは何か」というの本質に基づいて考えれば、首尾一貫した原理、原則の適用は不可能な事と言わざるをえません。可能なのは、具体的な状況の中から平和の条件を探ることにすぎません。そうすると、戦争はいけない、戦争は戦うべきだとは簡単に言えなくなるのです。

現実の世界における平和がどのように可能となるかを考える必要があります。

平和とは要するに戦争が行われていないという状態にすぎません。そして世界からすべての戦争をなくしてしまうことは難しいとしても、やはり戦争は例外的な出来事であり、世界の大半の人々に

とつて平和こそが現実の日常なのです。となると、実現が難しいのは、戦争の廃絶であつて平和ではありません。

もちろん問題は、どうすればその平和を実現出来るのかという点にあります。平和のためにすべての武器を廃絶すべきだなどという考えは、実現不可能なユートピアとしての平和に変わるでしょう。

逆に武器で脅さなければ平和を保つことができないと考えるなら、戦力放棄とは武力放棄に対して自衛的手段を捨て、自ら侵略に身をさらすような愚行にすぎません。平和についての議論は、実は平和そのものでなく、それと実現する方法をめぐる争いの歴史なの

です。

国際政治の主体は国家です。そして各国がその存続のために権力を行使する限り、国家間の協力関係はごく限られた範囲でしか成立しえません。国内の社会では、強制力を持つ主体は国家の他になく、その暴力を背後にして政府が法を執行することも可能となるのに対し、国際社会はそうではありません。

国際政治では、それぞれの国家に対して強制力を行使することができる法執行の主体は存在しません。国防を委ねることの出来る主体が存在しない以上、各国は武力を保持して、その存立を保つほか

に選択肢がないのは明白です。こうして、それぞれに主権を主張する国家が軍を保持し、対抗を続ける世界としての国際政治が存在するのです。

このように「国家に分断された世界」における政治とは、平等な主権を持つ世界国家が国益を最大にすべく権力闘争を繰り返す過程であり、法の支配とか正義とかを訴えても意味はないのです。法や正義は国際政治の領域に属する観念であり、国際関係は善悪正邪とは無縁の領域とみなされることになります。

国家より上位に立つ実効的な支配が存在しないという国際政治

の基本的特徴は現在でも変わっておらず、まして国家の防衛を委ねることの出来るような国際組織などは存在しません。国境を越えた交易や人の行き来がどれほど拡大しようとも、武力に頼らない国防を実現する保証は決してないのです。

国際政治の安定を考える上で、各国の間の抑止、威嚇、「力の均衡」を無視することが出来ない限り、政策の手段としての武力の必要性を排除することは考えられません。

古今東西の別なく、人類の歴史は異なる組織集団の分離、統合の繰り返しです。結局のところ、歴史の発展とは組織や共同体の盛衰

と交代の記録を、よりミクロに捉えれば、組織を掌握する権力者の盛衰と交代の記録にほかなりません。

時代の断面を切り取れば、組織や共同体の幸、不幸、繁栄、滅亡は指導者によって強く影響されていることがわかります。同時に指導者の持つ力と背負っている条件が組織の盛衰を左右し、興隆と滅亡を決定づける鍵となることが多いともいえます

一九九六年、台湾は歴史上初めての総統直接選挙を行いました。それまでの間接選挙から国民が自分たちの手で総統を選出する方式に変えたのです。この民主的な選挙が気に食わない中国は、選挙

戦のさなかに数発のミサイルを台湾沖へ「演習」と称して打ち込みました。明らかに台湾に対する「中国は戦争も辞さない」という威嚇です。

これに対し私はテレビ演説を通じて「ミサイルの弾頭は空っぽだ。こちらは幾つものシナリオを用意してある。心配することはない」と国民に訴えました。結果、国民の動揺は収まり、無事に選挙は実施されたのです。

もし私があの時、中国のミサイル威嚇に怖気づいて投票を延期したり、戒厳令を敷いたりしたら、中国の思う壺だったばかりか、国

民からの信任も得られなかったでしょう。私が強い信念と、手段をもって対抗したからこそ民主選挙が実現したと信じています。

日本を取り巻く環境はますます臭くなってきました。このような状況に置かれながら、国家の根幹を規定する憲法で戦力を保持しないということの規定していることは、自らの生存を放棄している、もしくはは他者の手に委ねていると取られかねません。

戦力を保持することは即ち戦争をするということではありませんせん。混沌とした国際社会のなかで、いじめられないために、自分の身を自分で守るために戦力を保持することが必要であり、国際社会

共通の認識です。

私が総統在任中も、軍備の充実には気を配りました。台湾の存在を維持するためには、自分で国を守らなければならず、日本やアメリカに頼るわけにはいかなかったからです。

台湾がF 16戦闘機をアメリカから購入した直後のことです。社会党の土井たか子党首が台湾へ来たことがありました。

彼女は、台湾が戦闘機を購入したことが良くないと考えていたよ
うで、「なぜ戦闘機を買ったのか」というようなことを何時間も延々と私に尋ねるのです。

私は「国を守る、これは総統の責任である。自分の国は自分で守らなければならぬ」という原則を知っていますか」と初めからこんなと説明してあげたのですが、それ以来、彼女は台湾へ来なくなっていました。

今、日本は「Gゼロ」の世界において、岐路に立っています。日本が生き抜いていくための改革をなし遂げるためには、日本人ひとりひとりが志をもって行動することが不可欠であり、誇りと自信を持たなければなりません。

それが結果的に東アジアの一層の安定と平和につながり、日本と

台湾のさらによい関係をもたらすことになるでしょう。日本と台湾は運命共同体です。日本がよくなれば台湾もよくなり、その反対も然りです。

日本が真の自立した国家として歩むことを心より期待して私のお話しを終わります。ご清聴ありがとうございました。